新藤兼人監督の作品を読む――「裸の島」

90を過ぎても現役監督として活躍する新藤兼人「裸の島」(1960年)をとりあげよう。モノクロで「ニッポンスコープ」という横長の映像で、製作は日本初の自主映画制作会社「近代映画協会」である。古いこともあり、映像はあまり鮮明ではなく、じつに淡々とした展開なのだが、なんとも言えない感動を覚えた。

瀬戸内の無人島、宿禰島が舞台であり、殿山泰司と乙羽信子が演ずる夫婦が必死で農作業をしている状況が克明に描かれている。農作業といっても、草も生えないような「裸の島」である。もっぱら水を遠くから船で運び、2つの重い桶をかついで険しい坂道を登って、荒れた畑に丁寧に水を撒くのである。こうした過酷な作業が繰り返し、繰り返し描かれる。サイレントではないが、夫婦の声はまったく聞こえない。瀬戸内の静かな波や櫓をこぐ音はあっても、夫婦の「台詞」はない。映像にマッチした林光の音楽が流れる中で、淡々と映画がつづいていく。

映画の冒頭、島の全容が「耕して天に至る　乾いた土　限られた土地」という言葉とともに映し出される。この映画の展開を暗示するようである。この映画を見ていて、前にレポートで取り上げた山田洋次監督の「故郷」を思い出した。「故郷」も瀬戸内で石材を運搬する夫婦の過酷な労働を描いたものだ。1972年製作であり、高度成長の終盤、石油ショックの前年であり、高度成長の一断面を鋭く描いた作品である。

「裸の島」のほうは1960年製作であり、まさに国民所得倍増計画が策定され、日本経済が高度経済成長に突き進む頃である。こんな時代に「裸の島」でつづけられる過酷で、一見すると「非効率な労働」、自然への働きかけに焦点を当てているのが興味深い。乙羽信子がせっかく運んできた貴重な水を投げ捨て、畑に泣き伏すシーンが感動的だ。それと子供(長男)が急病になり、必死に船をこいで医者を連れてくるが、すでに手遅れであり、埋葬するシーンも忘れられない。でも、子供たちの生き生きとした姿が描かれており、現代日本の「社会問題」を考えるうえでも参考になる作品である。

(4月24日　記)